

子どもたちの進路保障をめざすキャリア教育の創造

差別と貧困の世代間の連鎖を克服するために

栞原成壽

要約

格差社会の進行は個々の家庭生活を脅かし、そこで暮らす子どもたちの学力や生活体験、将来展望等や、保護者の子育ての不安や悩みにまで影響を及ぼしていた。とりわけ、校区の被差別部落のなかでは、差別と貧困の世代間連鎖を生じさせているかのように見える姿があった。それらの現状を克服していくため、「なかまづくり・学級集団づくり」を土台とし、「エンパワメントの力」「リテラシーの力」「キャリアビジョンの力」と呼んでいる三つの側面のもとに、子どもたちの社会的自立に向けた取り組みを進めてきた。

1 はじめに

伊賀市立柘植小学校では40年にわたって学校での人権・部落問題学習や、地域の人権センターでの木曜学習と呼んでいる地区学習会を進めてきた。また、低学力傾向克服のための授業の工夫や、気になる子どもへの家庭での話し込みや個別学習を進めてきた歴史がある。それでも、小学校勤務の経験しかない私には、タイトルにあげた「進路保障」について、これまでの取り組みの総和であることは知識としてあったものの、小学校ではさほど意識するものではないだろうと思っていた。

しかし、20年ぶりに柘植小学校に戻ったことにより、「進路保障は同和教育の総和」という言葉の重みに日々出会うことになった。

2 進路保障を意識せざるを得なかった訳 —2004年、再び柘植小学校に戻って

①生活状況による階層間格差の拡がり と一人親家庭の増加

2004年に再び戻った柘植小学校では、子どもの少子化現象とともに、取り巻く家庭や地域の状況に様々な変化が起こっていた。とりわけ、

その変化は校区にある200戸ほどの被差別部落のなかで強く感じた。

変化の一つ目は、保護者層の中に「安定した就労、差のない賃金」の階層と「不安定な就労、安い賃金」の階層の二極化が現れていることだった。

1980年代の後半、当時の同和教育推進教員（同推教員）として、朝、地区内の子どもたちの集合場所に立っていると、男性については地区内にある土木会社に出かけていく姿に多く出会った。女性については、パートさんだったり、地区内の作業所に勤める姿があった。家庭訪問をしても、同じように小集落改良事業で建てられた二戸一棟の住宅に住み、生活状況も傍目からはあまりかわらなかったように感じていた。

しかし、現在は多くの人々が、名阪国道ぞいの工場やさらに遠隔地にまで勤めにいっている。一方で、今日の経済不況や、公共事業の落ち込みのなかで、勤めていた土木会社が廃業になり、仕事を替わったり、探している人々も数多い。

二つ目は、一人親、もしくは祖父母に育てられている子どもの増加だった。

農村地帯にある本校でも近年一人親家庭が増

加している。昨年は17%が一人親家庭で、そのほとんどが母親の側と暮らしている現状があった。しかし、被差別部落のなかでは36%と、はるかに上回っていた。そして、同じようにそのほとんどが母親の側と暮らしている。こんな状況は、地区内外問わず20年前に見られなかった。

また、就学援助や生活保護は、被差別部落のなかでは70%前後が受給し、これも、学校全体と比べると3倍を超える割合になっている。さらに、被差別部落のなかの一人親家庭のほとんどが就学援助等を受給していた。

結婚した母親が子どもを生み、その後、いろんな事情があったのだと思うが、結果として離婚をし、仕事も辞めて実家のある地区内に戻ってきていた。そして、戻った後も働いているが、それはパートや嘱託であり、十分な収入を得ることができず、その生活状況は極めて厳しいということだった。

② 子どもたちに見える学力と生活経験の課題と、保護者の姿が問いかけるもの

そして、それらの子どもたちの様子を見てみると、標準学力検査においては低学力傾向であり、クラスのなかでの学力分布が二極化し、その下位層に位置づいていた。

また、修学旅行中のバス車内で高速道路のETCのゲート開閉にビックリしたり、海辺の交流会先で「海の水、はじめてさわった」とつぶやく子どもなど、生活状況や生活環境の違いが、生活体験の違いとなって現れてきている姿も数多く見られた。

特に、私にとって気になったのは、事情があって離婚をしたにせよ、仕事も辞めて戻ってくる母親たちの姿であった。苦労や努力をしてその仕事に就いたものではなかったのではないかと、辞めてもさほど悔いの残らない仕事に就いていたのではないかと、そのような指導しか私たち教員はしてこなかったのではないかと感じた。

さらには、家庭訪問や懇談会の席で、子育ての悩みは持ちながらも、「校長先生は、ああやこうやと言うけれど、今の私にこれ以上何をせよと言うの」とか、「子どものことより、私のことを聞いてほしい、考えてほしい」という言葉も出てきた。

この保護者たちのなかには、20年前に担任していた子どももいた。同推教員として少しなりとも関わったことのある当時の中学生たちもいた。これらの姿を見るにつけ、私たちの教育の営みは、それぞれの学校卒業時まででなく、その子がどんな仕事に就くのか、どんな大人になるのか、親になるのか、そして保護者としてどんな子育てをするのかにまで影響を与えるものであることに気づかされていった。

再び同じ学校に戻ってきたことによって、差別と貧困の世代間の連鎖に出会うことになり、「進路保障」の重さによりやく気づかされたと言える。

3 進路保障をめざす「キャリア教育」のとりくみ

① スタートは、5年生と6年生の2回の職場体験

日々の授業の充実とともに、とにかく、子どもたちが校区外の社会に出会い、生活体験を拡げ、将来の自分を考える機会を増やしたいと考えた。そして、赴任した2004年度の3学期に、5年生を対象に3日間、職場体験に行かせることにした。

迎えに行った車のなかで、子どもたちは緊張から解放された気持ちもあったのだろうが、その日にあった出来事をしきりに話をしてくれた。そのことに手応えを感じたこともあり、翌年からは、5年生と6年生の二つの学年で2回実施することにした。

3日間で、しかも、午前中だけの職場体験を

始めたのだが、それでも、子どもたちの体験先の希望は極力かなえるようにした。田舎であっても、アナウンサーになりたいと言う子どもがいたので、三重テレビ放送にお願いして毎日、津まで送り届けた。また、誰に頼ることもなく、少しでも一人で踏ん張らせる機会にしたいと考え、「一人一事業所」を原則に進めた。保育士になりたいと希望する女の子も多いのだが、5人いれば五つの保育所をお願いに行った。路線バスが廃止され、行政バスのみという校区のなかで、子どもたちを希望する職場に送迎することは大変な面もある。限られた教職員だけでは到底無理なので、保護者にお願いし、さらには「教育ボランティア」と呼ばれる地域の人々の力も借りて進めていった。

5年生と6年生の2回実施することの意味であるが、5年生の時にも、事前に練習はして行くが、多くの子どもが「あいさつ」や「返事」の声などの基本的なことも十分ではなかった。自分からなかなか話しかけられないなかで、職場の一員であることも意識できない。誰かに頼ることもできず、自分を保つことで精一杯の姿があった。

しかし、そんな5年生の経験は、その反省をもとに自分の課題を明確にして臨む6年生の職場体験に繋がっている。5年生の時と同じ職場に再びリベンジの気持ちをもって行く子どもや、指示される前に「次は何をしたらいいですか」と聞ける子ども、レジを任されるようになった子ども、「大きになったら、ほんまにうちに来てほしいわ」と言われて帰って来る子どもなどが毎年出てくるようになった。

② 修学旅行の見学地に「大学体感」を入れる

翌年の2005年からは、修学旅行のなかに大学見学を入れることにした。

農村地帯の校区のなかでも、大学に進学して

いる子どもは数多くいる。しかし、子どもたちは大学生に出会うことはほとんどない。それは、都市部と離れているため、進学しても下宿するか、朝早く家を出て、夜遅く帰ってくることによる。とりわけ、被差別部落においては、子どもたちの保護者層のなかにも、大学を卒業している父親や母親はほとんどいなかった。地区内での懇談会をしても、未だに「せめて、高校だけは」という言葉が出てきたこともあった。

職場体験をすることにより、子どもたちは、社会には様々な職業があることを知る。そして、どの職業にも苦労や工夫、喜びや誇りがあること、その職業に就くためには資格が必要なものもあること、資格を得るためには勉強をしなくてはいけないこと、そのために大学という選択肢があることを知る。なによりも大学という存在を少しでも身近なものにしたいと考えたことによる。

桃山学院大学での「大学体感」では施設見学とともに、窓口になっていただいた寺木伸明先生から、「大学とは、自分で受ける授業を決めるところ」というお話や、学生たちからは、自分が今目指していることや大学生活について話を聞いた。

10月の後半の時期だが、ブーツを履いて、おへそを出した、ちょっとオシャレな女子学生たちの「目指す仕事に向かって努力している」「今も、人権活動をしている」などの話にはたくさんの質問も出る。特に、本校の被差別部落の女子のなかには、「小学校では部落問題学習や人権センターで地区学習会もするけど、大きくなって外に出たら関係ないのやろ」という意識も見え隠れしていた。それらの子どもが「福祉の仕事に就くためには、どんな勉強をするのですか」「この学部では、どんな資格が必要とれるのですか」等の具体的な質問をする姿は、大きな影響を受けていると感じた。

「USJやディズニーへは連れてやることはできるけど、大学はよう連れて行かんし」と保護者のなかでも好評である。

③ 柘植小学校の「進路保障をめざすキャリア教育」の枠組み

キャリア教育を進めていくうえで大きな影響があったのは、当時、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが示した「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意志決定能力」の四つの領域と、それぞれに位置づいている八つの能力の枠組みだった。

けれども、本校の子どもたちの実態を見たときに、この枠組みでは、もっと大事にしなくてはいけないことが取まらないことも出てきた。本校がこれまでから子どもたちに対して大事にしてきた取り組みは、

- ①被差別の立場にある子どもたちの自信と誇りを獲得させること
- ②それらの子どもたちのなかに象徴的に見える、低学力傾向や二極化の下位層に位置する課題
- ③生活状況や生活環境による生活経験の乏しさをカバーするため、視野や経験を拡

げることにより、生活を高めていくことや、将来の自分を思い描くこと

であり、何よりも

④すべての教育活動の基盤は「なかまづくり・学級集団づくり」から

という原則を大事にすることだった。

この四つの視点が抜け落ちると、「柘植小学校にとってのキャリア教育」、いいかえると、「進路保障をめざすキャリア教育」にはならないだろうと考えた。

宝塚造形芸術大学（現・宝塚大学）の桂正孝先生に助言もいただきながら、職員で議論を重ねた結果、文科省の「キャリア教育」の枠組みを踏まえながらも、本校としての独自の枠組みを創る必要があると考えた。そして、行き着いたのが、「エンパワメントの力」「リテラシーの力」「キャリアビジョンの力」と名付けた三つの側面であり、この三つの側面の土台に「なかまづくり・学級集団づくり」があるということだった。その後、この一つの土台と三つの側面を具体的な取り組みとして文言化して、「柘植小学校マニフェスト」として公表した（資料「柘植小学校マニフェスト（2007年度）」参照）。

資料 柘植小学校マニフェスト（2007年度）

学校長

本年度の学校教育目標を「21世紀を切り拓くための『生きる力』を身につけた子どもを育成する。」～合い言葉は「読み・書き・算術、ボケとツツこみ」～とし、その『生きる力』の定義を「基礎・基本の学力の獲得」「現実の社会と向き合う力」「人権感覚」の力の統合と考えました。

特に、本年度は「キャリア教育」に力点を置き、それを形成するための「土台」と考える「なかまづくり」と、側面として考えた「三つの柱」を、マニフェストとして示しました。

達成度を A—実現、B—前進、C—取り組み中で示します。

土台として 「学級集団づくり・なかまづくりの質的向上」

達成度

1	暮らしの交流を通してのなかまづくりを進めるために、子どもたちの日記を掲載した一枚文集を、週2回のペースで年間70号以上発行する。	A・B・C
2	「見つめさせたい、この子の暮らし」に迫る日記や作文を書かせる。	A・B・C
3	子どもたちが「このクラス・このなかまだったら言える」というカミングアウトに対して、共感的な受けとめを返すことができる。	A・B・C
4	クラスのなかの一番「しんどい」子どもがわくわくする自主活動を創造する。	A・B・C
5	子どもたちの「学校診断票」の「学校へいくのが楽しい」の評価を、3.3点（昨年度結果）以上に高める。	A・B・C

第一の柱 「基礎・基本の学力の獲得」

達成度

6	学年平均点と比較して、大きな差がある経済的・家庭的状況の厳しい子どもたちの平均点を低学年では5ポイント、高学年では10ポイント以内に縮める。	A・B・C
7	上記の子どもたちの学習理解を高めるため、その子に視点をあてた「発問の工夫」の取り組みを進める。	A・B・C
8	CRTの結果、「読解力」や「数学的な考え方」の領域のC判定児童の割合を20%以下にする。	A・B・C
9	家を出る1時間前に起きる児童を、80%以上にする。	A・B・C
10	子どもたちの「学校診断票」の「授業はわかりやすく楽しい」の評価を3.2点(昨年度結果)以上に高める。	A・B・C

第二の柱 「人権・部落問題学習の深化と保護者啓発」

達成度

11	被差別部落の子どもたちが5年生段階で、全員、自分の社会的立場を自覚できる。	A・B・C
12	6年生の地区外の子どもたちが、「部落問題は被差別部落の友達の隣に座っている自分の問題」として捉えることができる。	A・B・C
13	人権・部落問題学習の成果を発表するときには、常に明るく、笑いの入ったものにする。	A・B・C
14	育友会対象の「同和問題を考える地区別懇談会」においては、保護者の参加率80%以上を目指す。	A・B・C
15	本校の教員が県内・外の研修会において、講師や助言者として招聘される実践を構築する。	A・B・C

第三の柱 「キャリアビジョンの創造」

達成度

16	柘植小学校としての「人権教育としてのキャリア教育」シラバスを完成する。	A・B・C
17	低学年では自分の暮らしや、生育史、家族の労働をテーマにした学習を進める。	A・B・C
18	中学年では多様なモデル像との出会いや、アントレプレナーをはじめとした様々な体験を通して将来展望を拡げる。	A・B・C
19	高学年の職場体験では、「一事業所につき一人」の原則80%以上を目指す。	A・B・C
20	職場体験の事業所評価の5項目について、4点満点中、5年生では3点以上、6年生では3.5点以上得ることができる。	A・B・C
21	特別支援を必要とする児童の「キャリア教育」モデル例を作成する。	A・B・C

4 具体的な取り組み

① すべての土台である「なかまづくり・学級集団づくり」の取り組み

「なかまづくり・学級集団づくり」で最も大事にしてきたことが、資料のマニフェストの1、2、4番目にあたる内容である。

子どもたちが毎日書いてくる日記のなかから一つを選び、改めて、担任の先生と子どもとで「思い出し直し」と「推敲」をする。その日記が掲載されたプリントを本校では「一枚文集」と呼んでいる。子どもたちが書いた内容は、家族のこと、友達のこと、自分の体のことで悩んでいることや、ときには、部落問題や外国人問題もある。それらを、朝の会や終わりの会で読みあい、子どもたちは互いの暮らしを知り合っ

たり、思いを返しあったりする（資料「6年一枚文集-ほっと」参照）。

② 「エンパワメントの力」の取り組み

本校では、マニフェスト12番目にある「『部落問題は被差別部落の友達の隣に座っている自分の問題』として捉え、自分のくらしと重ねて考えたり発言や行動できる6年生の子ども50%をめざす」という項目を最も大事なものの一つにしてきた。

部落問題学習を進めてきた子どもたちは、やはり先の「一枚文集」にその一端を書いてくる。6年生の「なつみ」さんのある日の日記である。

私のお母さんは、差別のことを家でよく話をします。私が学校で識字で学んでいるお

年寄りのことを総合で勉強した時、そのことを夜いつもお母さんに言っている。

お母さんも「差別がある」ということはわかっている、「部落差別はあかん。」と思っている。前も「いじめ」と「差別」のことを教えてくれて、私に「差別とかしたら、本当にいやな思いをする。」と話してくれた。

前に、私がこうじろう君の日記の返しを書いていると、お母さんが私の日記を見て、頭をポンとたたいた。なんでたたいたかはわからないけど、やさしくたたいた感じだった。

ふだんの私を見て、「いじめのこととかほっとくんちゃうか。」と思っていたと思うけど、その日記を書いた時に、「考えてる。成長したな。」と思ったんだと思う。私のお母さんも差別のことを考えていると思う。

これらの「一枚文集」を子どもたちが持ち帰ることによって、それぞれの家庭でも読まれ、保護者の部落問題を考える機会や、保護者同士の深い関係も創っていった。

③「キャリア・ビジョンの力」の取り組み

2年生のある子どもに、「知っている仕事の名前言ってみ」と尋ねると、二つしか言えなかった。その二つは、お母さんとおばあちゃんの仕事だった。「えっ、先生も仕事やろ」とあわてて聞き返すと、「先生って、仕事やったん」と返ってきたことがあった。

子どもによっては、2年生でも20以上の仕事の種類が言える子どももいる。様々な場面で、生活環境が影響していることを感じる。

5年生・6年生での職場体験や、修学旅行の「大学体感」とともに、それ以下の学年においても、「キャリア・ビジョンの力」を意識して

6年一枚文集

ほっと 2009

10月22日 第152号

母さんの話

拓斗

今日 みんなに ほくが 母さん というよに暮らしてないことを話した。

ほくは 卒業までには この話をみんなにしようと思っていた。

前までは 母さんの話は 知られたいし かくして おきたい話だった。そのことで 何が言われたいか かもって 心配だった。話したら 自分が つかくなるから 言いたく なかった。

でも 今ほくは 心配がない。2学期には 木曜で、冬休みの 木曜キャンプの 相談を している時、

「その日は 母さん帰ってくる日。」

と話したこともあった。その時は 思わすきで しまったけど、あつ 母さんのこと 言えたい と思つたら 心が 軽く なつた。それと、ほくは 木曜の子には 安心して 思うてる ことを せざるんだと、自分のことなのだから 時々 言っていた。

クラスの子に 母さんのこと 話して 心が ほっとした。言えたいことを 言えたら やらうか と思つて いた。父さんとも 暮らして ないことを 話した。また また 話して いた。

これが ほくが なる ほくの 第一歩 と思つた。

母さんの話は、話したら 自分が つかくなる話 でした。でも 今ほくは、心が ほっと する話 したの です。何が 拓斗さんを そう 思わせ たの でしょう。 考え て み たい ですね。

ほっと

2009

10月23日
第153号



たくとのお話

優美

今日は先生がいも帰りの会で読む「ほっと」と朝の会を読んだ。たくとの「ほっと」だ。先生は読んだ後、

「ちよっと話したいことがあるんやけど……」

と言った。先生は

「たくとと話せる？」

とたくとに話しかけた。たくとは自分がみんなに知ってもらおうと思っでいるけど、今まで友だちに一言も話してないことをみんなに話してくれた。内容はたくとのお母さんの話だ。たくとお母さんは事情があって大阪に行っちゃった。私はそれを聞いて「あ、いしやれ」と思った。

私も母がいなくなつてとてもつらかった。蒼王群行のリハーサルの時、他の子はお母さんが来たけど私は一人だ。リハーサルが終わって、父の迎えに来たけれど車で家に帰ると中、私はおみだが止まらないほど泣けてきた。でもお父さんには気づかれないうつらさで、家に着いて自分の部屋へ行って一人になると涙がまたおみだがで溢ってきた。車の中の時よりもおみだがで溢ってきた。だから、たくとのお話と私の思いは、いっしょやねと思った。

たくとが話して、先生も泣きながらたくとのお話をした後、最後に先生が、

きた。

特に、校外学習の場面は貴重な機会であると考えた。

低学年の社会見学では、観光バスを使わずにJR柘植駅まで歩き、嘱託の駅員さんに、握りしめていたお金を渡し「上野市駅までください」と一人ひとりが切符を買う練習をしてきた。

中学年では、鳥羽水族館のバックヤードツアーを行っている。学芸員さんに無理をお願いして、サメやマナティに毎日気を配りながら信頼関係をつくっている様子や、体調やえさの管理など、午前中時間をかけて見学や聞き取りをさせていただいた。そして、午後の最後にショーを見せてもらい、表舞台の華やかさにある裏方の努力を感じる経験をしてきた。

学校内でも、図書室や学級文庫にキャリアに関する書籍を置いており、特に朝の読書の時間での『13歳のハローワーク』の本は、4年生以上では様々な方法で活用されている。

「たくとのお話聞いて、自分も言っておきたいと思っことない？」とみんなにきいた。

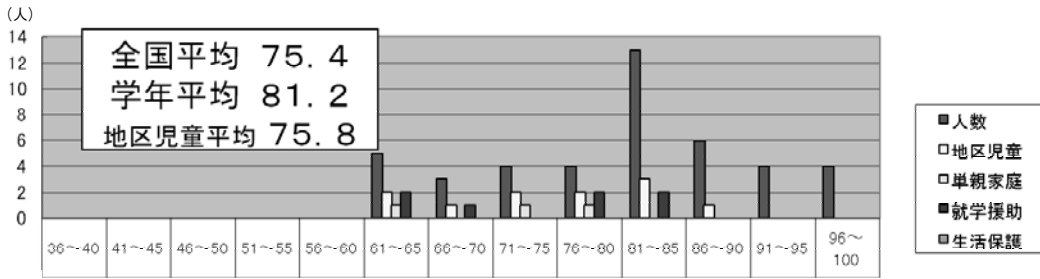
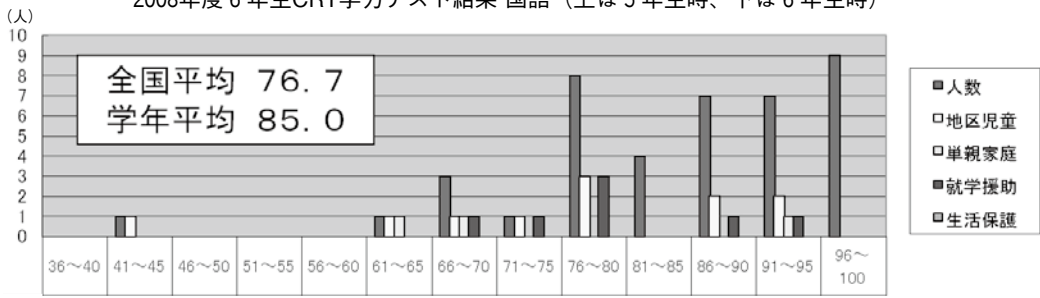
私は「前から今書いたことをみんなに言えたいけど、伝えようと思っでいた。だから、この時、言おうと思っただけで言えなかった。」

自分の暮らしている自分の思いをみんなに知ってほしい。でもそれが重ければ重いほど、悩むほど、言えにくいものです。

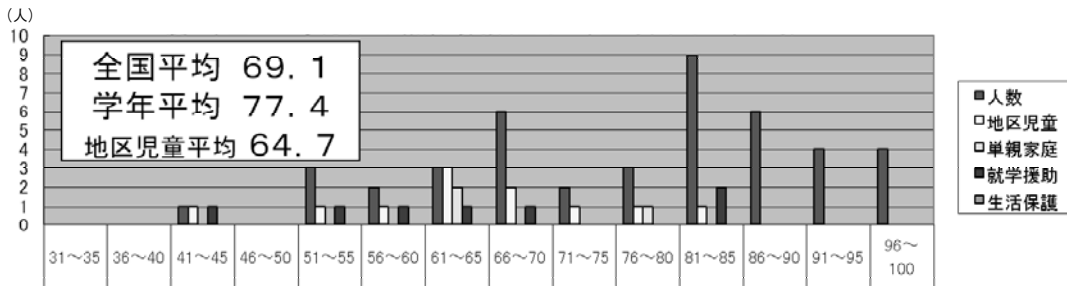
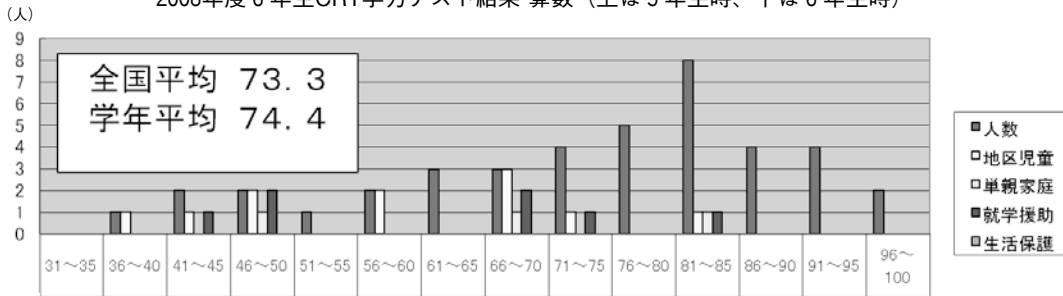
でも、拓斗さんも優美さんも、みんなに言えたいけど、伝えようしと2学期から思っでいたそうです。

なぜ拓斗さん、優美さんは、「知ってほしい」「伝えようし」と思ったのでしょ。私たちの次の一歩は何でしょう。

2008年度6年生CRT学力テスト結果 国語（上は5年生時、下は6年生時）



2008年度6年生CRT学力テスト結果 算数（上は5年生時、下は6年生時）



5 この間、取り組みを進めてきて

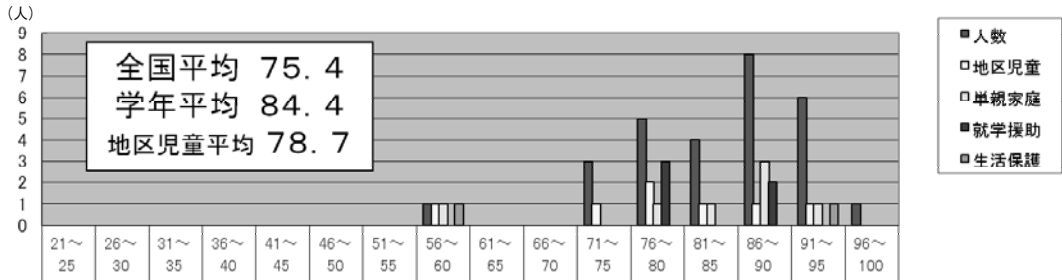
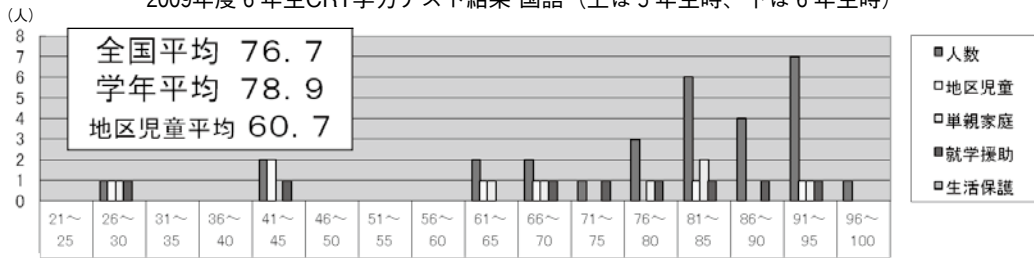
① 成果と課題が一番見えやすいのは「リテラシーの力」

この間、柘植小学校の枠組みでのキャリア教育を進めてきたが、その成果や課題が最も見えやすかったのが、「リテラシーの力」に相当す

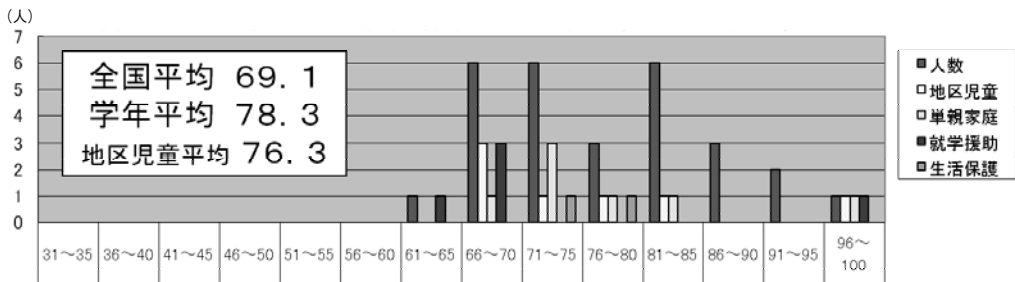
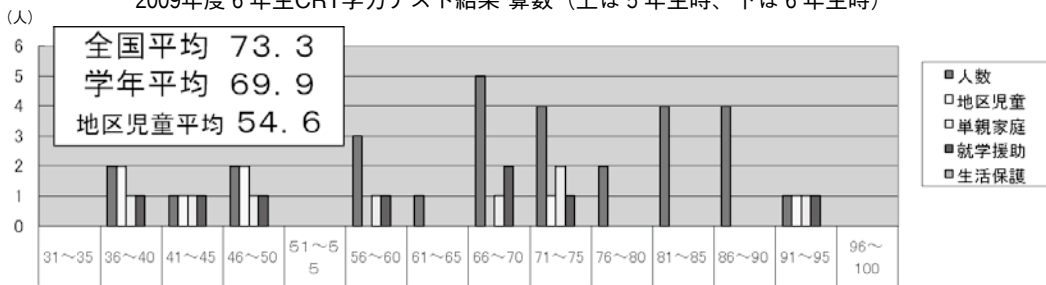
る教科の学力であったのではと感じている。繰り返すが、これまでから被差別部落の子どもたちの低学力傾向は積年の課題だった。

資料では、CRT標準検査と文科省の学力・学習状況調査の結果を、一人親家庭、就学援助家庭、被差別部落の家庭などの家庭的背景ごとの度数分布で分けてみた。子どもの人数が30人

2009年度 6年生CRT学力テスト結果 国語（上は5年生時、下は6年生時）



2009年度 6年生CRT学力テスト結果 算数（上は5年生時、下は6年生時）

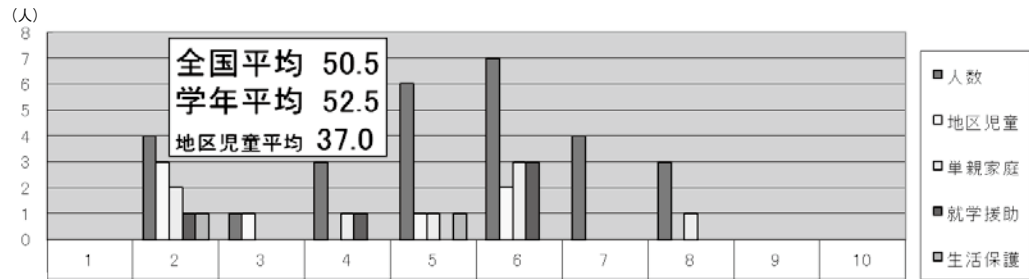
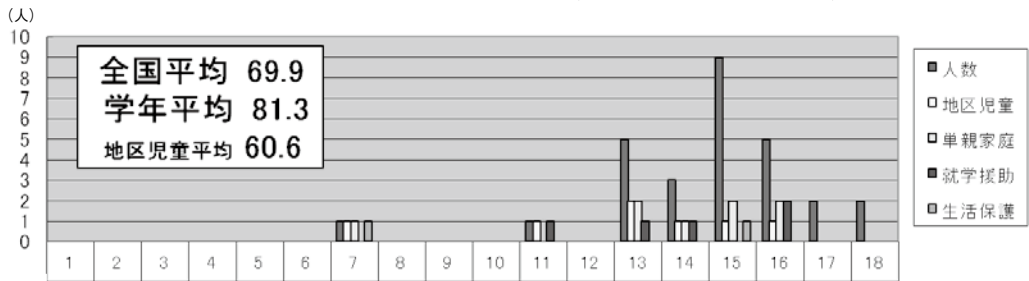


あまりなので、統計的な信頼度は薄いかも
ない。

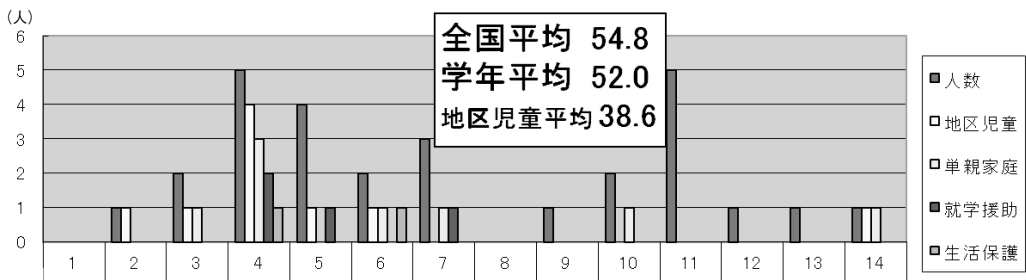
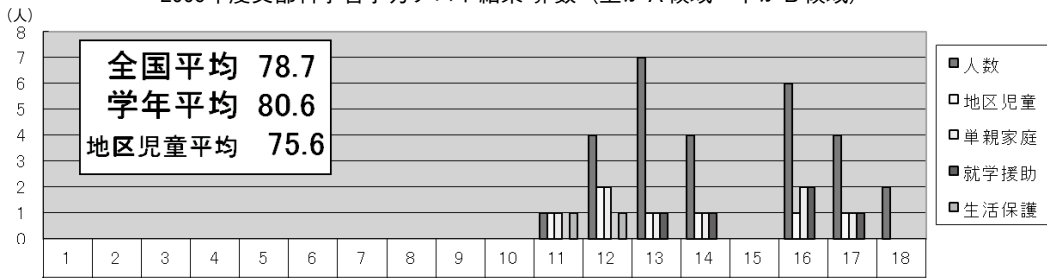
まず、伊賀市が実施しているCRT標準学
力検査を見る限りにおいては、国語・算
数とも、ほとんどが5年生時よりは6年
生時の方が上回ってきた。そして、
度数分布の形を見ても、二極化や、
ちらばりが均等になった、いわば「お

好み焼き」状態に近い形から、「山型」
に近い状態に変化しつつあるように見
える。このなかで、厳しい生活状況の
子どもたちの低学力傾向はクリアした
とは言いきれないが、全国平均より
上回ったり、学年の平均との差が縮
まっていることがうかがえる。このこ
とが成果としてあげられる。

2009年度文部科学省学力テスト結果 国語（上がA領域・下がB領域）



2009年度文部科学省学力テスト結果 算数（上がA領域・下がB領域）



一方、文科省が実施した全国学力・学習状況調査の結果を見ると、国語・算数とも基礎のA問題については全国平均を上回っているものの、学年の平均と被差別部落の子どもたちの平均を比べると大きな差が見られる。また、発展のB問題については学年平均そのものも全国平均より低いものもあり、特に、被差別部落の子

どもたちの結果が大きく下回っていることがわかる。

以上のことから、基礎・基本を重視したA問題については、それなりの結果を残せていたことになるが、長い問題文を読みこなしていくことや、学習内容を実際の生活体験のなかでどのように活用させていくかなどについては、学年

全体の大きな課題であるとともに、とりわけ、被差別部落の子どもたちをはじめとした厳しい生活状況の子どもたちに大きな課題を残していることがわかる。

② 教員の共通認識と、子どもの意識の変化が成果につながる

成果が見えた理由としては、「三つの側面」のどれが欠けてもだめであり、それぞれの取り組みが相乗効果をもたらすという、いわば、当たり前前の認識を教員相互が持てたことによると考えている。

特に、学力の向上については、学習時点では理解していても、二単元ほど先に進むと、それまでに学習したことを忘れてしまっていることが多く見られた。その現状を解決するために、授業における発問の工夫とともに、日常のプリントにそれまでの学習内容を意図的に盛り込んでいったことが効果をあげたと考えている。

また、厳しい生活状況の子どもの学力を高めいくためには、教員がそれらの子どもの暮らしをしっかりと把握することや、子どもとの関係をしっかりと築くこと、また、人権・部落問題学習のなかで、子どもたちが自分の暮らしや親の生きざまを見つめていくという、「エンパワメントの力」の重要性も改めて確認できた。

小さい頃に自分たち子どもや家族を捨てていった父親に対して、「うちは、おやじがきらいや。あんなおやじなんか」と同じ地区の友達につぶやく子どもがいた。彼女は祖母からの「あんな、おやじとちがう、おやじというか他人や」という言葉や、父親の写っている写真を燃やしている母親の姿を見るにつけ、「なんで、うちらをほっておいて出て行ったん」と父親に対しての憎しみが強くなっていく。しかし、担任との、繰り返しの語りこみと部落問題学習を進めていくなかで、「けれども、父親と母親がいたからこそ、今の自分が存在するのだ」と気

づきは始める。さらに、幼い頃のごく限られた父親との記憶をたどっていくなかで、父親に対する思いも「本当は、私たちと別れたくなかったのかも」と少しずつ変化していく。そして、「今度会ったときは、恥ずかしくない自分を見せていきたい、バリバリ働く自分を見せたい」と理学療法士を目指すことを考え、そのためにも、勉強が大事で、頭の痛くなる算数もがんばろうと決意していくようになる。

もう一つの側面である「キャリア・ビジョンの力」に相当する、5年生から6年生にかけての取り組みも、学力の向上のためには重要であったと考えている。

「私のしごと館」（2009年度末に閉館）や職場体験、『13歳のハローワーク』の活用などによって、子どもたちは、「将来の自分からの逆算」を少しずつだが意識していく。

パティシエになりたいと思っている子どもが、休日だけ高校生が開いているレストラン「まごの店」に見学に行く。高校生と一緒に料理を作るのを手伝わせてもらったり、話を聞かせてもらう。そして、他のお客さんが帰った最後に、高校生たちが作った料理を食べさせてもらう。そのなかで、料理人になるためにはやっぱり勉強も大事やと感じる。また、「パイロットになるためには目を悪くしてはいけない。だから好きなゲームをやめよう」「動物が好きだから獣医さんの仕事をしたい、そのためには、算数だけは誰にも負けたくない」などと考える子どもも出てきた。

③ なかなか成果が見えない活用の力

文科省の調査結果に見える課題については、まだまだ打開策が見いだせないままである。授業のなかで、活用の力を意識した展開などの工夫も進めているが、目に見える効果までは出てきていない。むしろ、活用の力を意識するあま

り、それまで時間をかけて進めてきたことによって保たれていた、繰り返しの学習やスキルの学習が少なくなり、結果として基礎的な部分も習得できないことになるのではという悩みもある。

新たな取り組みとして、昨年から、就学前における取り組みに目を向け始めた。

具体的には、就学前の保護者をお願いして、これまでの家庭での子育てを39項目にわたってチェックしていただいた。その結果をもとに保育所で学習会を開いていただいたり、日頃の保育所での園児への言葉がけも助数詞を意識する、アナログの時計を意識するなど、学力を意識した取り組みを地域や保護者の協力のなかで進め始めているところである。

6 継承・発展・創造の9年間をめざして

この4月から、私は「一小・一中」である柘植小学校から柘植中学校に転任した。

柘植小学校で6年間過ごし、残りの3年間を

この中学校で過ごすことができるかもしれない。もしそれがかなうならば、現在の中学1年生の子どもは9年間、追いつけることができるということになる。

これまでからも小中連携は大きな課題になっていた。小学校の側からすれば、送り出した子どもをどのように受けとめて、育てていこうとしているのかをいつも問い質す立場にいた。転任したことにより、問い質す立場から、問われる立場へと逆転した。

社会的自立の力をつけていくために進路保障をめざすキャリア教育の取り組みをくぐってきた子どもたちや、そのなかにあっても、ともすれば、夢を絵に描いた餅に終わらせかねない厳しい生活状況に暮らす子どもたちを、どのように受けとめ育てていくのかの課題に、4月から直面している。

「継承・発展・創造の9年間の実現」を目指しての新たな教育活動が、今始まったところである。